

# 稻萎縮病の発生と品種との関係 (概要)

藤川 隆\*・岡留善次郎\*・宇部宮 務\*

FUJIKAWA, T., OKADOME, Z., and UTUNOMIYA, T. Varietal Resistance to Dwarf Disease of Rice Plants.

## 1. 実験方法

大分農試圃場にて早期栽培は1955年5月25日、坪3合播とし、5月5日5.7寸×8の坪80株の5本植とした。肥料は苗代は坪当り堆肥1貫、硫酸50匁、過石60匁、硫酸30匁を基肥とし、本田は反当堆肥300貫、硫酸7.5貫、過石6貫、硫酸3貫の全量基肥とし、1区0.8坪4連制の乱塊法とした。普通栽培区は5月17日坪3合播とし、6月17日7.5寸×8の坪60株で3本植とした。苗代肥料は早期に準じ、本田は反当堆肥300貫、硫酸7.5貫、過石7.5貫、塩加2貫を基肥とし、硫酸4貫を7月18日と8月11日追肥した。1区は0.5坪の4連制の乱塊法とした。本実験を行うには出来るだけ接種量を一定にする必要があるが、未だ適切な方法を案出し得ないので自然発病に

よつたが、試験の反復及び調査個体数の増加により一応は満足するに足るものと思われる。

## 2. 実験結果

その成績は第1表の通りである。

尙大分農試での主要媒介虫であるツマグロヨコバイの誘殺数は半月別♀♂計で5月21匹(♀20), 6月19643(♀9875), 7月2545(♀1093)であつた。本病の発生と関係のある本期間の気象表は紙面の都合上省略する。

## 3. 考 察

稻萎縮病に対する罹病度の品種間差異は真に品種の耐病性によるか、又はツマグロヨコバイ及びイナヅマヨコバイの品種に対する嗜好性によるものかは更に検討を要する事である。尙本病の耐病性検定には同一条件の保毒虫を得ると同時に、如何にして接種量を一定にするかの問題を先ず解決する必要がある。

\* 大分縣農業試験場

第1表 稲萎縮病の発生と品種との関係(発病株率%) 1955年

早期栽培	調 査 月 日			普通栽培	調 査 月 日		
	6.14	6.27	7.6		7.6	7.21	8.5
1 照 錦	3.9	8.0	11.2	1 農林29号	15.1	34.4	40.0
2 巴まさり	7.1	15.0	24.5	2 農林22号	7.5	21.3	26.9
3 藤坂5号	5.3	13.1	23.1	3 大分雄町50号	17.6	30.7	34.5
4 陸奥光	2.9	7.9	17.8	4 農林37号	21.9	49.4	56.9
5 津軽旭	7.6	18.5	26.9	5 旭	10.1	28.2	35.7
6 愛子2号	7.8	12.3	19.0	6 ほぎかえ	9.4	25.0	33.2
7 陸羽132号	5.2	13.2	21.6	7 なかせんごく	19.4	41.9	46.9
8 農林17号	2.7	14.2	22.2	8 つるぎげ	14.4	28.2	32.6
9 農林1号	3.8	5.0	14.6	9 金作糯	15.7	40.7	56.3
10 黒 汐	6.6	10.3	17.8	10 大分三井120号	21.9	35.7	40.7
11 農林41号	6.9	10.1	20.1	11 農林18号	17.5	28.2	36.3
12 やちこがね	6.0	14.4	35.1	12 農林糯1号	19.4	34.4	43.8
13 農林21号	3.8	10.0	20.3	13 凱旋糯	26.9	36.9	41.3
14 水稻新5号	8.4	15.1	21.5	14 —	—	—	—
調査総株数	340	340	340	調査総株数	160	160	160

註 早期、普通栽培とも同一方法で4区制2試験(その1, その2)を行った。本成績は各2組の試験の平均である。尙大分農試での主要媒介虫であるツマグロヨコバイの誘殺数は半旬別♀を計で5月21匹(♀20) 6月19643(♀9875), 7月2545(♀1093)であった。本病の発生と関係のある本期間の気象表は紙面の都合上省略する。